

# ぶどうの木

2010年4月  
第90号  
聖アウグスチノ  
カトリック葛西教会

東京都江戸川区中葛西1-10-15  
03-3689-0014

## 信じない者ではなく、 信じる者になりなさい

(ヨハネ二〇章二十七節)

主任司祭 トマス小崎 柴田弘之

今年三月半ばを過ぎても肌寒い日が続き、強風で目覚める朝もありました。しかしどんなに厳しい冬のさなかにあっても、やがて春がやってくることを疑う者はいないでしょう。今年も復活祭を迎え、新年度が始まりました。新たな門出と出発の季節です。

時には私たちの生活のなかにも強い風が吹き、乗っている船が大波で揺れて心もとなく感じるときがあります。しかも悪いことは重なるもので、そのさなかにあつては「この風雨が本当に止め、凧のような静かな日々が果たしてやってくるのだろうか」と途方に暮れることもあります。

確か私が中学二年のときでした。母方の祖父が病気で入院し、母は実家に移り祖母とともに泊まり込みで看病にあたることになりました。父と妹との三人の生活になったのですが、よりにもよってそのような時に父が職場

の事故で数週間の入院。気付いてみると、小学生の妹との自炊生活が始まっています。夜中トイレに起きると両親の寝室からは寝息が聞こえず、しんとして柱時計の振り子

だけが響いているのが妙に寂しかったのを覚えています。ただ、料理や洗たくはいやだと思ったことがなく、案外楽しんでいたかもしれません。でもそれには理由がありました。母から連絡を受けた近所の方々、教会の友人たち、遠くに住む知り合いなどからいろいろなものが届き始めたからです。日持ちのいい食べ物、缶詰、野菜などなど。近所の同級生のお母さんからは「食べにいらっしやい」「洗たく物持っておいで」などと声がかかり、実際に何度かごちそうになったことを覚えています。ある神父様からはぜんぶ英語で書かれた得体の知れない缶詰が届き、近所の家に持って行って見てもらうものの、だれも中身がわからず、恐る恐る開けて食べたのはちよつとした冒険でした（それが生まれて初めて食べた「タン」でした）。その夏に祖父が他界、やがて父も退院して再び家族四人がそろいました。安堵感とともに一種の達成感を覚えたものでした。

不安、孤独な状況に追いやられるとき、普段当たり前だと思っている生活が揺るがされ、未知の状況が眼前に差し迫ってきます。でも

そんなときこそ、自分の殻を割って一歩外に出るチャンスなのかもしれません。いろんな人たちを通して、中学二年だった私は神さまからその勇気をいただいたのだと思います。人の親切を信じ、神さまをより深く信じられるようになるための大切な出来事だったとふり返っています。

いつも私たちを力づけ、引き上げてくださる神さまに、いっそう信頼する心を育てていただけるように願いつつ、この復活節を過ごしてまいります。

## ☆☆☆人事移動☆☆☆

この度、急な異動ではありませんが、笹丘教会のドワイヤ神父様のアメリカ帰国に伴い、千早養成の家の今田神父様が笹丘教会へ転出されることとなりました。2年間という短期間でありましたが、ごミサ、黙想会と大変お世話になりました。ありがとうございます。

後任には柴田神父様が当たられます。



## 2010年 信徒総会報告

アウグスティヌス 佐藤隆一

日時：2010年2月21日 11時40分～13時

場所：カトリック葛西教会 聖堂

配付資料：

2010年カトリック葛西教会信徒総会資料

信者総会資料議案書

2010年地区会

(信徒総会議事録より一部抜粋)

〈総会議題〉

1・柴田神父様ご挨拶

2・総会開催宣言

3・本橋教会委員長挨拶

4・教会執行部委員紹介

委員長：本橋俊和

副委員長：森山ハツエ、佐藤隆一

書 記：中島敏之

会 計：平 淳子

以上五名が紹介され、規定により今後2年間の任期で、拍手をもって承認されました。

5・委員会報告及び各部会報告

本橋委員長より2009年度の報告。

(信徒総会資料をご覧下さい)

各部会より信徒総会資料の補足説明、及び世話人のメンバー紹介がありました。

今年執行部の委員の改選があり、また女性

部及び地区会の一部メンバーが交代になりましたが、中には後継者が見つからず高齢化が

進み、世代交代がままならないといった現代

の世相も垣間見えるようです。

6・年間行事予定報告

信徒総会資料(24～25頁)をもとに、20

10年度の上期教会行事予定をお知らせしました。

7・会計決算報告と予算案

【一般会計、建設会計、一粒会会計】

会計の今井さんより、2009年度決算と

2010年度予算案の報告がありました。

2009年度の収入は前年度より若干の減

少がありました。今年教会補修費の献金積

み立てがあったこと、現状の厳しい経済状況

にあることを考慮すればある程度やむを得ない

事力も、とのコメントでした。

【信者会計】

会計の平さんより、2009年度決算と

2010年度予算案の報告がありました。

最後に各部会及び決算と予算に対する質疑

応答の時間を設けましたが、特にご意見もな

く、各部会の2009年度の報告、及び20

09年度会計報告、2010年度予算案は満

場一致で拍手を持って承認されました。

柴田神父様により終わりの祈りを捧げ、

2010年度信徒総会を終了いたしました。

皆様のご協力に感謝いたしますと共に、

これからどうぞよろしくお願いいたします。

主のご復活おめでとうございませう

パドアのアントニオ 本橋 俊和

本年度より教会委員長に任命された本橋です。そして副委員長に佐藤隆一さん・森山ハツエさん、副委員長兼書記に中島敏之さん、会計に平淳子さん、このメンバーで与えられた2年間を頑張つてまいります。宜しくご支援頂きますようお願いいたします。前にも挨拶で申上げた通り、お年寄りが大切にされ、若い人たちが活発で風通しが良く、祈りの伴った活動をする教会にして行きたいという心の憧れを持っていきます。その目標に向かって出来ることからひとつひとつやって行きたいと考えています。今は神様が私たちに「教会のために尽くしなさい」と仰っていると受け止め頑張つてまいります。

私たちに聖霊が働いてくださるよう皆様のお祈りを心からお願ひいたします。



## 建物管理部便り

ドミニコ 佐々木 満夫

昨年、建物管理部では、雨漏り補修や建物維持をどうしたら良いのか、いろいろ検討してきました。

とくに、補修の財源をどう工面するのか？2月から、ミサ中で補修の為の特別献金を実施しました。緑色の献金袋をつくり、通常の赤い献金袋と区別がつくようにしてみました。皆さんにとっては、毎週2度の献金になるので、大変なご負担だったと思います。

さらなる財源を確保する為に、話し合いを度々重ねました。以前、葛西教会でやったことがある、じゃがいもの販売や油の販売も再開してみてもどうかと言う意見も出されました。しかし、「宗教法入」という枠がある限り、教会内での収益行為は難しい、との意見もあり、何かを販売して財源の一部にするということは、断念せざるをえませんでした。

ここに至って、多くの皆様にご寄付を募ってはどうか、ということになりました。近隣の教会や他のアウグスチノ修道会所属の教会に、広く呼びかけてみてはどうか、と：ところが、それは、アウグスチノ修道会本部の許可を得なければできないことが分かりました。その許可を得ることは、大変困難なことだそうです。そこで、あくまでも葛西教会内での呼びかけに限定せざるをえませんでした。

5月の教会委員会で、話し合いをしました。ミサ中の特別献金を中止し、葛西教会に所属している二十歳以上の信者を対象に、目標額一千万円の寄付の呼びかけをすることになりました。信者名簿にのっている二十歳以上の方は、820名。その中には、ご高齢の方も含まれます。収入のない学生も含まれていま

す。専業主婦の方もいらっしやいます。

その時から、ミサ中での特別献金を中止し、呼びかけ文を作成し、820名の宛名書きにとりかかりました。一人ひとりのお顔を思い浮かべながら、そして、祈りながら、宛名を書きました。新しく買い求めたボーペン一本が丁度無くなった7月末に、全員に郵送しました。

8月からの郵便振り込みを受け付けた結果、驚くほどの早さで、寄付が振り込まれてきました。12月の終わり頃には、目標額に届く勢いでした。皆様の熱心な思いが、ひしひしと伝わってきました。そして、神様のはからいを、しみじみと感じました。この葛西教会には、特別な恵みと使命と試練とが与えられていると思います。みんなで応えていきましょう。

現在は、工事をする建設業者の選定作業に入っています。2月24日に、現場説明会を行いました。5社がその説明会に参加してきました。その5社が、3月20日にそれぞれ見積り書と提案を持ってきます。それを受けて、工事業社を選定します。工事業社が決まれば、工事内容の検討と、工事時期の設定作業にかかります。その後の進捗は、「お知らせ」などで、できる限り皆様にわかるようにします。

当然のことながら、ご寄付いただいたお金は、一円たりとも無駄にせず、補修および保守管理の為に有効に使う努力をするつもりであります。

これからも、建物管理部へのご理解とご協力を、よろしくお願いいたします。

## お世話になりました

ヨゼフ 日高輝郎

この記事を読んだ皆さんが読んでいることは、私はフィリピンで第3の人生を始めたころだと思っています。

葛西教会に事務職として勤務したのが、2005年の5月です。丸5年間皆さんにご迷惑をお掛けいたしましたことになりました。いたらない私ごとき事務職お任せくださいましたことを皆さんに感謝致します。とともに行き届かなかつた面はなにとぞご容赦くださいますようお願い申し上げます。

また、私たち夫婦のために送別パーティーまで開いて下さいまして、まことにありがとうございます。

私たちは今のところ年に2〜3回は日本に帰ってくる予定であります。その時は以前同様よろしく願います。

また、フィリピンにくる予定がありましたら、ぜひお立ち寄り下さい。

本当に長い間、お世話になりました。教会の平安と皆さんの健康を祈念し、神に感謝！

(日高さん。本当に永い間、教会のために働いて下さって、ありがとうございます。みんなが、日高さんに、感謝しています。

いつまでも、お元気でフィリピンにいて下さい。そして、たまには日本に帰ってきて下さい。みんな、待っています。)

## 荘厳誓願式

### 荘厳誓願式を終えて

アジジのフランシスコ 井出 正弥

人は、自分自身の死に接した時、過去の全ての思い出・記憶が、走馬灯のように流れ見えるというのを何かの本で読んだ事があります。今回の荘厳誓願式の間、今までの自分の信仰生活の歩みが次々と、思い出されていきました。

ネガティブな思い出は一つも出ず、良い思い出ばかりが現れてきました。良き信者様達との出会い。沢山の信者様達にいただいた沢山の親切・優しさ・おもしろいやり。迷った時に的確なアドバイスを下さった方々。私の為に沢山お祈りして下さいました。

また、人様との関係だけではなく信仰生活の道に迷ったり外れたりしても、必ずまた同じ道に連れ戻された不思議な事も。各修道女会のシスター方、信仰グループの方々、信者会、各教会の婦人部の方々、事務の方々、四つの教会で日々食事を作って下さる方々、修道服を作って下さった方々、個々のお名前は書き切れませんが、この場をお借りして心より厚く御礼申し上げます。

本当に有り難う御座いました。御恩をいただいた方々に直接、御恩をお返しすべきなのですが、修道者として微力な者として、皆様から個々委ねられている御旨をなすとげられますように、日々お祈りさせて頂きたいと思えます。

新しいスタートを切った私目を懲りずにまた見守り下さい！皆々様に感謝！神様に感謝！

### 井出さんを与えてくださった、神に感謝

使徒ヨハネ 松尾 太

井出さんに初めて出会ったのは、わたしが高校生の時でした。その時はわたしはもちろん、井出さんもまだアウグスチノ会には入会していませんでした。その時の井出さんはシヤイというか、もの静かな方だという印象でした。その頃には一緒に生活することになるとは夢にも思っていませんでした。

自分が修道会に志願して、3年が経とうとしていますが、わたしがこの3年間の様々な経験のなかで、時にふらついたり、あきらめそうになりながらもまだ修道会に留まらせて



いただくことができているのは、養成担当の神父様方はもちろんですが、井出さんがずっと共にいてくださったおかげだと強く感じています。

わたしが修道会に入る直前に会った井出さんは入会しずでに初誓願をたてておられました。最初の時とは少し変わって、とても明るく朗らかな印象を受けました。

そして、わたしが修道会へ入会をゆるされ、千早の養成の家で井出さんと共に生活するようになってから、本当に、井出さんの、初めて会ったときには気づかなかった魅力に気づかされる日々でした。修道院での生活習慣に、



なかなかよく慣れずに時間を守れなかったりと、兄弟の皆さんに本当にいろいろ迷惑をかけていました。井出さんはいつも慰め、励ましの言葉をかけてくださり、そして、あの大きな笑顔で安心させてくれました。

料理も上手な井出さんの作るカレーは絶品で、共に住むわたしたちはいつも大喜びでした。また、井出さんは修道院のなかの日用品の買出しや共用物の洗濯など、目立たないけれども大切な仕事を、「ホーホーホー」と、マホニー神父様のような掛け声とともに、いつも丁寧にしてくださっていました。修道生

活・共同生活のあらゆる面で、本当に母親の様にお世話になりました。

そんな井出さんが莊嚴誓願をたてる決心をされたとき聞いたのは、昨年末に近づいた頃のことでした。井出さんは昨年夏にお父様を亡くされましたが、そのお父様の看病を長くしてらっしゃいました。そのなかで長い間、深い悩み、苦しみがあったと思います。修道会で生活を続けるという決心をするのは、わたしが安易に想像できるような苦労ではなかったのではないかと思います。

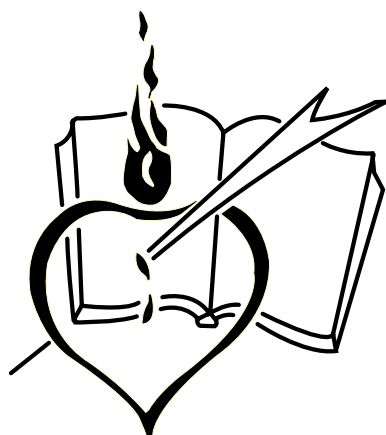
本当に決心を固められたのはいつかはつきりとはわかりませんが、本当の辛さや苦しみはあまり表に出さず、常に笑顔を保ちやさない井出さんは、秘かにしかし確かに、神様の御旨にご自分を重ねて生きる決心を固めておられたのでしよう。

誓願式の御ミサは、前日までの黙想会に参加していたアジア太平洋地区のアウグスチノ会の兄弟の皆さんもともに与り、とても喜びにあふれた祝いの場でした。井出さんは、決心を固めたといっても、やはり直前まで不安があったのではないかと思います。侍者をしていただいたわたしは、連願が歌われる時にうつぶせになった井出さんの修道服をきれいに伸ばしながら、喜びと共になんともいえないものを感じました。けれども立ち上がった井出さんは、しっかりと大きな声で誓願文を読み上げられました。誓願が宣立され、それが分管区長の今田神父様によって受け入れられて、修道会の兄弟たちと抱き合っていたとき、思わず涙があふれそうになるほど嬉しく、井出さんと出合い、また共に過ごすことができ、心から神様に感謝しました。そし

て、わたしが代弁させていたいただいた御ミサのときの挨拶は、さすがは井出さんとしか言いようのない、ユーモアと親しみあふれるものでした。

なんだか自分のことばかり書いてしまいましたが、井出さんは、本当に周りの人の心をあたためることができる方です。子どもたちや生活に苦しむ人、病気の人をいつも心にかけている井出さんの笑顔や思いやり、いつの間にか支えられている方も多いのではないのでしょうか。今、井出さんと共に歩んでいけることを神様に感謝しながら、わたしもあきらめずにこの道をゆく決心をあらたにしていきます。

井出さん、莊嚴誓願宣立おめでとうございます。しょうがない弟ですが、これからもよろしく願います。





## 荘厳誓願式

聖母奉獻修道会

シスター 鷲尾 和子

早春のいぶきが感じられる二月十三日、聖アウグスチノ修道会の井出正弥さんの荘厳誓願式に本会より五人参列させていただきました。

アメリカ、韓国、フィリピン、オーストラリアからの会員の方々も来ておられ、聖アウグスチノ会の国際色豊かな共同体を垣間見ました。

総長代理の今田昌樹神父様の司式のもと、荘厳誓願宣立にあたっての問いかけに、井出さんは

「はい、望みます。」

と力強く応えられ、その声が今も私のうちに響いています。

誓願宣言立の中で、聖アウグスチノの祈りが唱えられました。

「私が愛するのはあなただけです。あなただけを求め、あなただけに従い、仕えようときめました。」

聖アウグスチノが真理である神をひたすら渴き求め、たどりついた心の叫びが伝わってきました。

式後、パーティーの会場では、ご婦人の方々がご馳走を準備してください、とてもおいくいだきました。有難うございました。そしてなによりも会場が温かい雰囲気にも包まれ、よろこびにあふれていました。「兄弟がひとつになつて生きることが何という恵みであり、喜びであるかを」

(詩編133-1参照) 感じためぐみの日でした。

## ブラザー井出の誓願宣立によせて

ヨゼフ 中村貴也

今年2月13日にアウグスチノ修道会のブラザー井出が誓願をたてられました。いつもみんなの前でミサをたてる神父さまたちと違い、陰ながら教会や教会に来る人々の事を見守りつづけている姿の井出さんが、この日はみんなの前で一番輝いている時でした。荘厳誓願式というタイトルから、重々しい式かと思いきや、井出さんのお茶目なキャラクターが随所にちりばめられたとても心和む温かい式でした。(ホントに感動しました!!)

僕が葛西教会に来始めたのは7年ほど前、その時井出さんは既にブラザーとして教会で働かれています。教会学校のキャンプや黙想会の時など、様々な活動でとてもお世話になりました。特に印象的なのは、教会で酒盛りをしている若者(?)達の酒盛りで勧められても飲まず、体調管理のために忍耐している姿。いつもごめんなさい!目の前でお酒飲んだりして!!体調管理のためとはいえ、見習うべきといつも反省しております。

そして、なによりも教会学校のキャンプの準備のときに僕が完璧主義的計画をたてて、みんなに押し付けようとした時、井出さんは「大丈夫、なるようになるさ!」と僕のイライラを和ませるように言葉をかけてくれました。この現代の東京でストレスだらけの仕事に忙殺されている人々にとっては、井出さんは天使に見えるようです(と、僕の周りの数人が言っております)。

僕たちに見せるそのお茶目な姿と人目を忍んで祈り働かれています。この誓願を機にま

すまず神様からのお恵みでお茶目さに、祈りに働きに磨きがかかる事をお祈りいたします。そして、神様に仕えるものとしての道を私たちに伝え続けてください。

改めて、井出さん、誓願宣立おめでとうございませう!!

## 次兵衛会より

昨年、会が行われた時の集合写真です。次回は、4月25日に行われる予定です。



## 「生かされて」

ベルナデッタ 日永 由紀子

私はALS（筋萎縮性側索硬化症）という難病です。運動神経のみが侵され、徐々に全身麻痺、呼吸麻痺へ至る進行性の病気です。原因は不明で、治療法もありません。発症は25才の時、妊娠中でした。その頃の私は信仰とは無縁で、ただ奇跡が起きることだけを信じ、ありとあらゆる民間療法を試みました。

しかし奇跡など起きるはずもなく、数年後、私の呼吸は止まり生死の淵を彷徨いました。やがて体力も回復し、在宅療養の体制も整い、退院することができましたが、私はすべての希望を失い、闘病生活に疲れ果て、心は死に向かっていました。家族にかかる重い介護の負担、理解のない福祉制度、慢性的介助者不足の問題を自分一人で抱え込んでしまい、「私は家族や社会のお荷物、生きる価値もない、死にたい」と思うようになりました。

そんな心の限界を迎えた時、イエス様と出逢いました。イエス様は私を驚嘆みで暗闇から引きずり出し、病床のベッドの上で、マホニー神父様とおして洗礼の秘跡、柴田神父様とおして堅信の秘跡を与えてくださいました。私は闘病生活から解放され、病気も、動かない体も、歪んだ心も、そして命も、すべてをイエス様に委ね、今、私は自由に飛び回り踊っています。イエス様から身に余る愛と恵みをいただき、マリア様から「祈り」というお仕事をいただき、とてもとても幸せです。この幸せを一人でも多くの人と分かち合えることができそうです。

## 成人式を迎えて

ヤコブ 大場 優貴

教会から成人式の案内をいただいて、本当に戸惑ってしまいました。何か知らないうちにもう二十歳ということ、そして教会での成人式ってどのようなものだろうか、とか。式当日は、少し不安で一人だと恥ずかしいな、と思っていました。白濱さんが一緒に少し安心しました。

成人になった実感が正直湧いてきません。昨年、病気で倒れた母が式当日、本当に嬉しそうに出席してくれたことは有難いことでした。多くの兄弟を懸命に育ててくれた母や、大変お世話になったシスター・レミー、教会の多くの皆さん、JFYの友人たちへの感謝の気持ち一杯です。有難うございました。一つの夢はJFYのコミュニケーションの仕事をしてみたいということでした。

そのためにまずフイリピンに留学し「英語」をマスターしたいです。これから夢を求め続けていきたいと思えます。

私は教会が大好きです。今後とも宜しくお祈り致します。



## 感謝の成人式

セシリア 白濱 佐和子

この度は成人のお祝いをして頂き、本当にありがとうございました。まず感謝の辞を、二十年間大きな怪我や病気がなく、絶えず優しく時に厳しく、惜しみない愛と教育を与えてくれた両親に捧げます。手のかかる子どもだったと思いますが（今でも度々心配かけてごめんさい）、この日を無事に迎えられるのはおおらかで優しいけれど厳しいお父さんと明るくてよく気が付く真面目なお母さんのおかげです。そして教会のみなさまに、日頃見かけない私でも暖かく祝福して頂き、驚きと共にとっても嬉しく感謝しています。

小学生の時に初めて葛西教会に来て日曜学校に通い、初聖体を頂いたのを懐かしく思い出します。

その後中学・高校では部活と勉強に、大学生になってからは遊びと勉強に追われ教会からは少し足が遠のいていましたが、いつも教会の皆さまは暖かく迎え入れて下さり、その度に自分のような人でも受け入れてもらえる嬉しさと神様の下の共同体の強さと素晴らしさを実感します。

これからはもう少し参加出来るように頑張りますので、みなさまこれからもどうぞよろしくお祈りします。

## 研修旅行を終えて

アヤ・テレサ・オカンポス

### 「Good morning, Aya.」

おはよう以外の挨拶が当たり前だったこの研修旅行で、私は多くのことを学び、最高のクリスマスを過ごすことが出来ました。言語の壁などは2日目までに乗り越えて、10日間を楽しみました。言葉がいつもうまく伝わっていた訳ではないのですが、笑いが絶えることはなく、仲良く毎日を送りました。これからも付き合っていきたいと思える、掛け替えのない仲間ができて、とても嬉しかったです。

私はマニラ生まれの日本育ちなので、フィリピンに行っても自然に触れる機会は今までにありませんでした。フェルトガラでマングローブを見て、自然の偉大さを実感しました。ビーチは今まで見て来た中で一番美しかったです。そういうフィリピンの宝物を私も護っていきたいと思いました。バギオでは現地の子どもたちと触れ合いながら、JFYとして自分は何をしていけば良いのか考えることが出来ました。

一緒に過ごしたJFCをはじめ、沢山の人の生き方・考え方・おもてなしの心に触れ、フィリピンって素敵だな、と思いました。そして自分もその国の一員だということが誇りに思えるようになりました。以前よりも「私はフィリピン人です」と胸を張って言えるようになりました。

この研修旅行を可能にして下さった全ての方に感謝したいです。このような素晴らしい機会に恵まれた自分は、とても幸運でした。いつかはフィリピンのために働きたいです。

## Reflection of JFY Study Tour

Aya Teresa Ocampos

### "Good morning, Aya."

We went to a study tour to the Philippines and had the best Christmas there. One of many things that I learned was the variety of ways of saying hello. So language was not a barrier for me and the rest of the participants. There was laughter among us all the time and built a friendship that we will cherish for a life time.

I was born in Manila and brought up in Japan and although I have been there, I haven't had a chance to see the nature in the Philippines. When I saw the mangrove in Puerto Galera, I felt the greatness of nature. The beaches there were the most beautiful ones that I've seen before. Those treasures should be preserved and I'd like to be a part of it. In Baguio, when we interacted with the local children, I realized the big role of JFYs, including myself.

It was so great to see the beautiful places in the Philippines, and experience the ways and values in life, and the hospitality of the Filipinos, especially the JFCs. Now, I am proud of myself to be part of them, to say out loud that "I am Filipino."

I was lucky to have been able to join the trip and would like to thank everyone who gave me this opportunity. In the future, I would like to work for the good of the Philippines.





# JFYフィリピン研修旅行報告

津田 友理香

## 旅行の目的

昨年末の12月21日から31日まで、JFY（ジャパニーズ・フィリピーノ・ユース；日比青少年）は、10日間の研修旅行をしました。今回は、フィリピンに拠点を置くJFC（ジャパニーズ・フィリピーノ・チルドレン）との共同プロジェクトということで、日本（JFY）から7人、フィリピンから（JFC）6人の青年男女、そして、引率者4人、オブサーバー1人という大人数で一緒にミンドロとバギオに行きました。旅行の目的としては、主に高校生以上の日本とフィリピン両国のダブルの子たちが共に生活することで、「もうひとつの文化」を学び、お互いに分かち合うことです。また、JFYとJFC共通のミッションは、環境とボランティアに関心をもって学ぶことでした。このことについては後述します。

今回、日本から参加したメンバーは皆、非常に多様なバックグラウンドを持っています。日本国籍を持つ、フィリピン国籍を持つ、フィリピン生まれ、日本生まれ、フィリピンには毎年行っている、10年ぶりに行くなどなどです。共通点は、日本で育ち、日本に生活の基盤を置き、両親が片親がフィリピン人だということです。中には、日本語とタガログ語（もしくはビザヤ語）を理解し、話せるという非常に恵まれた子もいました。私自身は、タガログ語は日常会話レベルしかできないので、主に英語／日本語の通訳をしていたわけですが、すでに両方の言語を習得している子どもたちにはいろいろな場面で助けてもらいました。

そして、カウンターパートとして、パティスセンターの青少年団体である、パティス・ヨギの子どもたちが参加しました。彼らは、フィリピン生まれのフィリピン育ちで、日本名を持ちながらも日本にいる家族と会ったこともなく、一度も日本に行ったことがない子が大半です。また、さまざまな事情で、シングルマザーの家庭で育てられた子が多いのです。一方で、日本語や日本の文化に関しては、青少年団体での活動に関わったり独学で勉強したりしていて非常に熱心な子たちです。そんなJFYとJFCが日本とフィリピンの両文化を学び、両国をつなぐ懸け橋となっていく大きな一歩としてこの旅行が企画されたわけですが、実際の旅行中のさまざまな出来事やそのとき感じたことなどもお伝えできればと思います。

## マニラでの初対面とプエルト・ガレラ

21日早朝、成田まで見送りに来てくれた家族と別れ、期待と不安とで胸をいっぱいにしたJFYたちは、約4時間のフライト後、フィリピンの地に足を踏み入れました。空港からマカティ市に向かい、アサンブション大学の学生寮に到着しました。そこでは、JFYとJFCが初めて対面し、遅めのランチを食べながら、お互いに自己紹介をしました。そして午後は、部屋割りのメンバーに分かれて近くの大型ショッピングモールに行きました。JFYにとって、まだまだ慣れない土地で、JFCと話す言葉も違うので、まだお互いに少し距離があったようです。

（次頁に続く）

# Report of JFY Study Tour to the Philippines

Yurika Tsuda

## Purpose of Study Tour

Last year from December 21st to 31st, the JFY (Japanese-Filipino Youth based in Japan) and the JFC (Japanese-Filipino Children based in the; Philippines) went on a joint study tour to Mindoro and Baguio. There were 7 JFY members and 6 JFC members, plus 4 chaperones and an observer. The purpose of this tour was for the youth of above high school level to learn "the other culture" of their parent(s) by interacting with one another. Also, a common mission for JFY and JFC was to learn about the environment and volunteerism.

The JFY members included some who are citizens of or were born in the Philippines or Japan. Some have travelled several times to the Philippines. What they had in common is that they were brought up and are currently living in Japan, and either have one or both Filipino parent(s). While Japanese is their common language, some JFYs could also understand and speak and Tagalog (or Visaya). I, myself can only speak basic conversation of Tagalog so I was in charge mainly with English-Japanese translation. Thus, there were several times when those bilingual youth helped me in communicating with everyone!

Our counterpart was the Batis-YOGHI youth group in the Philippines. They were all born and brought up in the Philippines, have Japanese names but most of them have never been to Japan or met their family in Japan. Also, many are living with their mothers and relatives in the Philippines. The JFCs were all full of enthusiasm to learn about the language and culture of Japan, by joining some activities in the youth group and sometimes studying by themselves. I believe that JFYs and JFCs are the hope of the future to become a bridge between the Japanese and Filipino cultures. I share here beautiful pictures that show the wonderful experiences we had during this 10-day trip.

## First Meeting in Manila and Puerto Galera

In the early morning of Dec. 21st, JFYs said good-bye to their families who sent them off came to Narita airport. Carrying their hopes and worries in their hearts, the JFYs safely arrived in the Philippines after more than 4 hours flight. We went to Makati and stayed at the Assumption College dormitory. There, the JFYs and JFCs met for the first time and we had a late lunch, where we gave our self-introductions. Then in small groups, we went to a nearby shopping mall, although there they were still shy with each other, as can be shown in their faces, as the JFYs still being new to a place, and the JFCs spoke to them in a different language.

その翌日は、バタンガス港まで車で移動し、小船に乗ってプエルト・ガレラに向かいました。フィリピンには無数の島がありますが、そのなかでも生物の多様性や自然そのままの姿が見られるのが、このミンドロ島です。世界中から海洋生物学者やダイバーたちが訪れるほどです。南国というイメージがぴったりするリゾートで、毎日のように海水浴、日光浴をし、スノーケリングやマングローブ林でのハイキングを経験することもできました。ここでは、砂浜で相撲やフィリピンのゲームをして遊んだことや、ジープに乗りながら車中カラオケ大会をしたことが印象的でした。

また、ちょうどクリスマスの時期ということもあり、24日イブは、深夜ミサに参加し、その後は夜通しクリスマスパーティーを楽しみました。パーティーでは、豪華なお食事とプレゼント交換、ゲーム、寸劇や歌、ダンスなどの出し物を披露し合いました。また、2ヶ国語の創作劇では、JFYとJFC混合で2グループに分かれ、JFYはタガログ語、JFCは日本語でセリフを言うという難しい課題にも挑戦しました。そういったゲームやアクティビティを通じて、お互いの考えや価値観などに触れ、また大自然のオープンな雰囲気にも助けられて、少しずつ心が開けていったような感じになりました。とりわけユーモア溢れるメンバーが多かったので、笑いは世界共通であることを実感しながら、言葉の壁を乗り越えてひとつになっていきました。

## バギオでのクリスマスキャンプ

いったんマニラに帰って各自ホームステイを体験した後、バギオというフィリピンの山岳都市にバスで7-8時間かけて移動しました。そこでは、シスターたちが宿泊し、夏の避暑に活用されているリトリートハウスでお世話になりました。そして、今回初めての試みである、現地の先住民イゴロット族の子どもたち約50人と1日半のクリスマスキャンプを行いました。キャンプでは、体操やゲームで身体を動かしたり、折り紙やキャラクターのイラストを教えたりしました。そういった子どもたちと一緒に遊んだことは自分たちにとってとても貴重な体験だったのですが、逆に子どもたちから教わったことも多かったです。現代の日本についての紹介をした後、日本がフィリピンを「占領」した理由についての質問を受けたときは、はっとさせられる瞬間でした。また、ゲームの賞品を手渡すときに、生き生きとした表情を見せてくれ、彼らの強い感謝の気持ちが表わされました。

旅行の前半が「バケーション」のようだったのに対して、後半は、「ボランティア活動」をしたのでリーダーシップという新たな視点が求められ、社会に貢献することの意義を少しでも感じ取れたのではないのでしょうか。実際に、子どもたちをまとめて一緒に遊ぶという体験は、難しい部分もあれば、もっと楽しんでもらいたいと思う部分もあったでしょう。

今後、JFYのサマーキャンプなどでこの経験を活かしていければと思います。また今回の研修旅行に参加した青年男女がこれを機にフィリピンと日本の両方の言語や文化を積極的に学び、新たなジュニアリーダーとして活躍できるよう、願っています。

最後になりますが、JFYや葛西カトリック教会やバティス・ヨギやAMAの皆様、サポートをくださったスポンサーの方々、そしてとりわけシスター・レミへの感謝の気持ちを述べたいと思います。

The next day, we drove to Batangas port and headed to Puerto Galera on a small ferry. It is located in Mindoro, an island where there is diversity of living things and nature preserved just as it is. Many marine biologists and divers from all over the world visit this island. It is also a resort area because of its beautiful beaches where one could swim, sun bathe, snorkel, and hike in the mangrove forest.

The JFYs and JFCs played sumo and a Filipino game (patintero) in the sand, and had a karaoke party in the jeepney along the way to the beaches. Also, we experienced simbang gabi (midnight mass) in the Christmas Eve and had a party all night long. In the party, we ate a big treat with some fun activities like exchange gifts, games, and presentation of a play, song, and dance. The highlight was the performance of an original bilingual play, which JFYs and JFCs were mixed in two groups, and made a play in Tagalog and Japanese. It was challenging because JFYs spoke a line in Tagalog while the JFCs spoke a line in Japanese. Thanks to the open atmosphere of the great nature, the youth seem to become more and more open-minded. Also, because of humor which became our universal language, they were able to overcome the language barrier and finally became one.

## There were such funny members! Christmas Camp in Baguio

After JFYs each experienced a home stay JFC families, we then moved to Baguio, the mountainous region in the Philippines. It took us 7 to 8 hours by a bus. We stayed in a retreat house where the sisters stayed. There we had a day and a morning of Christmas camp with the Igorot (native) children of about 50. It was a first time to include such volunteer work in this kind of study tour. In the camp, we taught them many exercises and games, and how to do origami and draw an anime character. It was not just a precious experience for us, but also gained many lessons from the children. When I introduced them about the modern Japan, one of the children asked a question: "Why did Japan conquer the Philippines?" It was surely a striking moment. Also, when we handed prizes to children, we saw how bright the faces were and how much they are grateful to anything given to them.

The first half of our trip was almost like a "vacation", and the latter half was a "volunteer work". It needed some sense of leadership and the youth could catch some meaning of doing social work. Actually, there were difficult times of facilitating and playing with children at the same time.

I hope to make use of our 10-day experiences in the Philippines for this coming JFY Summer Camp. I hope that our members could learn more about the language and the culture of Philippines and Japan. In addition, I hope that they become more and more involved in our community as the new junior leaders.

Last but not least, we would like to thank the members of the JFY, Kasai Catholic Church, Batis-YOGHI, AMA, our sponsors, and most of all, Sister Remy.